

安心・安全で明るいまちに

犯罪や非行の防止と暴力追放の啓発活動を実施



本厚木駅北口で啓発物品を配布

本厚木駅周辺で7月に、「社会を明るくする運動」と「暴力追放・街頭犯罪防止キャンペーン」を実施しました。市や厚木警察署、犯罪や非行の防止に取り組む関係団体から約120人が参加し、啓発活動やパトロールに汗を流しました。

この運動は犯罪や非行のない地域社会をつくる全国的な活動で、市内では1984年に開始。2005年からは、キャンペーンも同時開催しています。

参加者たちは、通行する人に犯罪防止や更生保護、暴力団排除などの啓発物品を手渡しました。参加した押部修一厚木警察署長は「活動のおかげで管内での刑法犯認知件数も減ってきている。苦しむ人を一人でも助けられる社会にしたい」と話しました。

二度と戦争を起こさないために

沖縄県糸満市の語り部が依知南小学校で講演

3年生の頃に沖縄戦を経験。この日は「少女の見た沖縄戦」をテーマに、写真や絵などを見せながら戦禍の沖縄の様子を伝えました。上原さんは「私が体験した悲しい思いは、みんなには絶対にしてほしくない。二度と戦争は起こしてはいけません」と語りました。児童たちは「今日聞いた話を周りの人にも伝えたい」「当たり前の日常を大切にしたい」などと話していました。



子どもたちに自身の体験を伝える上原さん



市立依知南小学校で、友好都市・沖縄県糸満市出身の語り部を招いた戦争体験講話が実施されました。6年生94人が参加し、平和の尊さを学びました。

語り部の上原美智子さん(86)は、小学

平和を考えるきっかけに

あつぎ市民交流プラザにキッズゲルニカ「平和の絆」を展示

ウクライナの子どもたちが描いた絵画「平和の絆」を、6月19日から7月3日まであつぎ市民交流プラザなどに展示しました。会場には募金箱も設置。約1200人が訪れ、およそ10万円が集まりました。

展示は、「国際平和」と核兵器廃絶を求める都市」を宣言する市が主催。絵画は、ウクライナの子どもたちが、東日本大震災からの復興を願い2017年に描きました。会場には絵画の創作に携わったキッズゲルニカ富士宮実行委員会の渡邊実さんも来場。

「絵を見た方に、ウクライナで起きている戦争の悲惨さを自分事だと感じてほしい」と話しました。



小林市長に絵画の説明をする渡邊さん(右)

地域の課題解決に向け対面で意見交換

「自治会長と市長とのまちづくりフリートーク」を実施

「自治会長と市長とのまちづくりフリートーク」を、6月から8月まで市内15地区で実施しています。約200人の自治会長と、交通安全、防災・減災、カーボンニュートラルの実現などをテーマに意見を交わします。

トークは、市長が掲げる「現地対話主義」の一環で実施し、今年で16回目。初日の厚木南地区では、「交通死亡事故ゼロ」をテーマに意見を交わしました。自治会が通学路を点検してまとめた地図を基に「看板の設置やカラー舗装などの対策」「交通安全意識を高める教育の充実」などの提案がありました。小林市長は「対応できるものは、すぐにでも対応していく」と答えました。



厚木南公民館でのフリートークの様子



第10回

みんなで!

SDGs

持続可能な社会を目指す世界共通の目標「SDGs」。その達成のために17の目標を知り、できることから実践しませんか。

目標15 陸の豊かさを守ろう

世界では、1年間で日本の約14%の広さの森林が失われ、約4万種もの生物が絶滅しています。陸の豊かさを守って砂漠化を防ぎ、多様な生物が生きられる環境にしましょう。



できる取り組みは?

FSC®認証マークが付いた製品を選択する

このマークは、適切に管理された森林の木々を使い、基準を満たした企業・組織が加工・流通する商品に付けられます。マークの付いた製品を選ぶことは、森林保全につながります。



このマークが目印

山や森にごみを捨てないようにしましょう

山や森に捨てられたごみは、自然破壊を引き起こす大きな要因の一つです。小さなおみでも、積み重なることで環境に大きな影響を及ぼします。できるだけごみになるような物を持ち込まず、自分のごみは必ず持ち帰りましょう。

企画政策課 ☎225-2450



小林市長
小林 幸良



記者会見で祭りの開催をPR

感染症の影響で2年にわたり中止していた「あつぎ鮎まつり」を、6・7の両日に開催します。パレードの自粛や出店の縮小など制限はありますが、メインの花火大会では相模川上空に約7000発を打ち上げます。スポーツイベントなどの制限が緩和に向かう一方、他都市では花火大会を中止するという話も耳にします。「今年はやってくれるよね」「沈んだ気持ちを晴らしてほしい」。私

い。この思いに実行委員会から全会一致で賛同を頂いた瞬間、「オー! あつぎ」の強い意思を感じました。日本の打ち上げ花火は江戸時代、疫病退散や鎮魂への思いから始まったと聞きます。時代は流れて令和の世、人類は新たな感染症との戦いを強いられています。「コロナに負けるな」。真夏の夜空を彩る大輪は、皆さんの心に元気を運んでくれると確信しています。

の元には祭りを待望する声が寄せられていました。逡巡する中、前へ進む勇気をくれたのは皆さんからの熱い思いでした。社会がウィズコロナにかじを切る中、いつまでも立ち止まっているわけにはいきません。「対策を徹底した上で開催したい」